

令和4年度 奈良市立東登美ヶ丘こども園 研究実践概要

園長名 辻 里香
全園児数 103名

1. 研究主題

主体的に活動し、感性豊かな心を育む
～ 自ら 考え やってみよう ～

2. 研究年度 3年度

3. 研究主題設定理由

園生活の中で子ども達は、保育者や友達との出会いやかかわり、遊びを通し生きる力の基礎を身につけていく。また、身近な環境(ひと・もの・こと)にかかわり、様々な経験を積み重ねていく中で、主体的に活動するようになり、感性豊かな心が育まれると考える。

保育者は、子ども達が自ら「やってみたい」「やってみよう」とする気持ちを育む方法や、それが実現できるような援助や環境構成について検討をしていく。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子どもが、主体的に活動する姿や気づきを大切に受け止め、一人一人の成長・発達の段階を捉えた援助や環境構成の在り方を探る。

②研究の重点

- ・保育内容や環境構成について保育者間で話し合い、日々の実践を繰り返す中で子どもが主体的に活動する要因を探る。
- ・成長、発達段階を踏まえ、子ども自らが主体的に関わろうとする環境構成や保育者の援助について各年齢ごとに考える。

③活動の方法

<ぼくもつかまえない!> 3歳児 5月 自ら考えやってみようとする姿

虫が好きなA児とB児がダンゴムシを捕まえて飼育ケースに入れている。C児はダンゴムシを触りたいが怖くて自分で触ることができずに、二人の様子を気にしながら図鑑を見ている。A児とB児はダンゴムシがいそうな場所に移動し、再び探し始める。その様子を見ていたC児が、そっと二人に近づいて虫かごを覗き、そばにいた保育者に「ぼくもダンゴムシ捕まえないから虫かごちょうだい。ダンゴムシどこにいてるの?」と尋ねた。「ダンゴムシはどこにいるのかなあ」という保育者の声に気づいたB児が、ダンゴムシのいる場所をC児に伝え、C児がダンゴムシを捕まえようとするが、怖くて捕まえることができず、「先生捕まえて」と言っている間に、B児が捕まえてしまう。C児が諦めずに自分で捕まえられるよう「他にもいるかもしれないし探してみよう」と誘いかけ一緒に探していると、C児がダンゴムシを見つけ、友達に捕まえられないように恐る恐るではあるが少し急いで手を伸ばし、自分で捕まえた。自分で捕まえることができた嬉しさからA児とB児に「ほら見て。Cが捕まえた」と、満面の笑みでダンゴムシを見せた。それを見たB児が「すごいなあ。もっと探

そう」とC児を誘い3人でダンゴムシを探し始めた。

(考察)

- ・身近な生き物に触れられるように虫かごや図鑑を準備するなど環境を整えておくことで興味を持ち、かかわろうとすることができた。
- ・友達がダンゴムシを捕まえる様子を見たり、保育者と一緒に捕まえたりすることで、自分も捕まえてみたいという気持ちにつながった。

〈ぼっくり〉 3歳児 11月

自ら考えやってみようとする姿

クリスマスプレゼントにももらったぼっくりでクラス全体で遊んだ経験から、遊びの中でも挑戦するようになってきている。紐を引っ張りながら歩くことが難しいようで何度も挑戦している姿がある。子どもの様子を見ながら、保育者が一緒に紐を持ち「いち、に、いち、に」とかけ声を掛けて子ども達を励ますようにしていた。A児とB児はバランスを崩したり落ちたりしながらも「いち、に、いち、に」と言いながら何度もぼっくりに挑戦している。繰り返し歩いているうちに、ぼっくりの底にあるニコちゃんマークの足跡が園庭に沢山ついた。それを見つけたC児が「先生、ニコちゃんいっぱい」と指さしながら嬉しそうに保育者に伝えた。それを聞いていたA児とB児も「ニコちゃんいっぱい」と喜んでいる。「A君とB君がいっぱい頑張ってぼっくりに挑戦したからだね」と声を掛けると、A児とB児は笑顔で頷いた。その様子を見ていたC児も「僕もする」とぼっくりを持って来て、A児とB児と一緒に挑戦し始めた。A・B・C児はぼっくりに乗って歩こうとしたり、その場で足踏みしたりして園庭にマークををつけては、「ニコちゃん増えたね」と嬉しそうに話している。「ニコちゃんもいっぱいにする」と3人で楽しんでいるうちにA児とB児はバランスよく歩けるようになった。

(考察)

- ・ひもを引っ張りながら歩くことが難しく、バランスを崩し失敗することもあったが保育者が一緒に手を持ちかけ声をかけながら気持ちを合わせ子どもと歩いたことで、あきらめずに何度も挑戦する姿につながった。
- ・ぼっくりの底にマークが付いている事に気付いたC児の発見に保育者が共感したことで自分もやってみようという気持ちになった。

<小さな穴の正体は何か> 4歳児 5月

自ら考えやってみようとする姿

園庭で身近な生き物に興味をもち、友達と一緒に探して遊んでいる。A・B・C児は虫が好きで園庭でよく虫探しをして一緒に遊んでいる。築山の上へ行くとたくさんのアリがいることに気付き、3人でアリを見ていると小さな穴が空いているのを見つけた。A児「これ何かな？」と不思議そうに見ている。するとC児が「アリが穴の中に入った」と発見し、落ちていた小枝で穴をつつくと穴がふさがってしまった。C児が困った様子で見ていると穴の回りに細かい砂が積もっているのを見つけた。「先生見て。さら砂みたいな砂がある」A児も「本当だ。茶色や。色も違う」と見ていると近くに同じような穴やさら砂を見つけた。「ここにもある」とB児、C児に知らせ「さら砂もあるな」と興奮気味に言う。保育者は子ども達の喜びに共感しながら「そのさら砂は何か？不思議だね」と投げかけた。すると、B児「アリが運んできたんだよ」A児「どこから？」B児「砂場だと思う」A児「そうかな？遠いやん」と話し合うが納得していない。再び3人でじっと静かに穴を観察し始める。するとアリが穴から出たり入ったりしているのが見えた。保育者も3人と一緒に観察したりアリの動きを伝えたりした。B児「穴の砂を運んでるんじゃないかな？」それを聞いたA児が「分かった。穴を掘っているんだよ」と伝える。3人は謎が解けたかのようなすっきりした顔で「あー！」と言い顔を見合わせて頷いている。C児「他にもあるかも」と周りを探すとさら砂が積もった穴がいくつもあるのを見つけた。「茶色のさら砂の近くに穴があったらアリがいるってことだね」と気付いたことを嬉しそうに話していた。

(考察)

- ・見落としとしてしまいそうな小さな穴やさら砂が積もっていたことを不思議に思い、気の合う友達同士で意見を出し合っている。保育者は子ども達の話しを聞きながら、興味が深まるようにタイミングよく声をかけたり気付きを知らせたりすることで子ども達の話しも進

み、自分達で穴の正体を考え合う姿につながった。

〈バスケットゴールみたいにしたい〉4歳児10月 自ら考えやってみようとする姿

廊下に置いたかごをゴールに見立て、ボールを入れることを楽しんでた。ゴールを高くしたいという思いからフープにポリ袋をつけて、柱の自分の背の高さ辺りにフープをガムテープで固定して、ボールを投げていた。何度も投げるうちにフープが重みで柱にくっつきゴールの口がふさがりボールが入らなくなった。B児が「全然入らない」と保育者に伝えに来る。どうしたらいいか問いかけるとA・B児が「ガムテープでもう1回つけよう」と提案した。近くにいたC児が「テープで貼ってもまた同じことなるで」と言う。他に方法があるか尋ねると、A児「あ！バスケットゴールみたいにしよう！」と思いつく。保育者はB児に共感しA・C児にバスケットゴールを知っているか確認し思いを共有する。B児「バスケットゴールはもっと上についてるよ」と言うとA児「そうだ！紐でつけよう」と閃き、B・C児も賛同しみんなでやってみることにした。保育者はスズランテープを用意し子どもたちの声を聞きながら柱の上の方にゴールをくくる。早速B児が挑戦してみると高すぎて入ったボールが取れなくなってしまった。B児「バスケットは、ここ開いてるから切ろう」とポリ袋の下を切ることを提案した。保育者はB児の意見に共感しA、C児に確認してポリ袋の下を切る。再びB児が挑戦してみるとゴールに入ったボールが下に落ちてきた。B児は「やった！」と歓声をあげA・B・C児がうれしそうに顔を見合わせた。A、C児も急いでボールを持って来てゴールをめがけボールを投げ遊び始めた。

(考察)

- ・遊びの中で困っていることの原因やどうしたいのかを保育者がその場にいた子ども達に投げかけたことで自分の思いを話したり友達の意見を聞いたりしながら解決策を見出しながら遊びがより充実したものとなり楽しむ姿へとつながった。
- ・自分たちがイメージしたゴールを実現できるように材料や用具を準備し、思いを聞きながらゴールを作ったことでさらに意欲的に遊ぶことができたと考える。

〈泡に色をつけたいな〉5歳児6月 自ら考えやってみようとする姿

石鹸を削ったり、水の量を調整したりしながら泡遊びを楽しんでいた。いつもと同じように泡の入ったボウルを保育室の前に並べているとA児が「全部同じ色だから私の作った泡がわからなくなりそうだから色をつけたいな」と保育者に話していた。近くにいたB児が共感し、泡に色をつける方法を考え始めた。保育者と話をする中でA児が「絵を描くときに使うクレパスを使おう」と話した。そこから1本のクレパスの先を泡の入ったボウルの中に入れてたり出したりしながら10回つけた。しかし色は変わらなかった。「クレパスを500回つけたらいいかな」と大げさな話を保育者が投げかけたことで近くにいたC児が「石鹸みたいに削ってみたらいいかも」と話し、ためらいながらもおろし金で削って混ぜてみたが色は変わらなかった。その様子を見たA児が「絵を描く時に使うペンはどう？」と投げかけた。話を聞いていたB、C児が「Bの持っているペンは水に弱いよ」「金魚すくいごっこで水についたら金魚の目がなくなったからだめだね」と今までの遊びの経験から話をしていた。保育者は子どもたちが考える色をつけるために使うものに改めて気付けるよう話をした。するとA児が「絵を描くときに使う絵の具だ！」と目を輝かせながら友達に話す。そしてワクワクした表情で絵の具を泡に注いでみると色に変化した。泡に色をつける方法を発見し友達と喜んだ。

(考察)

- ・子どもの「やってみたい」「やってみよう」とする気持ちや姿を大切に保育をしてきた。クレパスの本来の使い方とは違うがあえて見守ったことで、泡に色をつけるためにどうしたら良いか友達と試行錯誤する過程を楽しむことができたと考える。
- ・これまでの経験からクレパスやペン、絵の具の特性を自分なりに考え、友達と話し合いながら試すことができた。経験の積み重ねや、思いを伝え合える人間関係、やってみたいことを実現できる環境が子ども達の自ら考えやってみる姿に繋がっていくと気付いた。

＜風装置＞ 5歳児 11月 自ら考えやってみようとする姿

A児が穴の空いた段ボールを見つけて遊び出した。A児「この箱穴が空いていて面白そう」
B児「面白そう、穴が空いているし、はてなボックスみたい」と穴に手を入れたり覗き込んだりしている。そこへC児も来て「私も見たい」と穴を覗き込もうとした時、A児が「叩いてみよう」と箱をボンと叩いた。するとちょうど覗き込んでいたC児の髪がフワッと揺れて「うわ!」と驚く。3人は顔を見合わせて驚きながら笑っている。A児が「もう一回」と箱を叩くとC児の髪が揺れ「すごい風!」と言う。A児は「この穴から空気がいっぱい出てくるんだよ」と何度も箱を叩いて空気が出ることを楽しんでいる。

そこへD・E児も「やってみたい」と空気が出ることを繰り返し楽しみ出した。D児「空気も風も見えないもんね」と言い、少し考えてから「これ置いてみよう」とそばにあった画用紙を置いて箱を叩いてみる。E児「ちょっと動いた」D児「力が足りないのかな、Eくん一緒に叩いてみよう、せーの!」と二人が息を合わせて叩いてみる。D・E児「さっきより動いた」A児「風で動いてるんだよ、風装置だ!」と話す。繰り返し遊ぶうちにD児「もっと軽いものの方がいいと思う」とティッシュペーパーを持ってきて置く。D・E児「3, 2, 1」と息を合わせて叩くとティッシュペーパーが舞い上がった。「わーっ、すごい!」と見ていた子どもたちが喜んでいいる。軽いものの方がよく舞い上がることに気付き、スズランテープを乗せて試す。舞い上がる様子を見て、D児「すごい!花火みたい」とその後も様々な素材を試して遊んだ。次の日には、「風装置持っていこう」と戸外で落ち葉などの自然物を舞い上がらせ、花火に見立てて遊ぶ姿があった。

(考察)

- ・身近な素材に目を向け、興味を持ち遊びに取り入れた中で、偶然起こった自然現象に面白さを感じ、友達と一緒に思いを伝え合い風が穴から飛び出る発見を楽しんだ。
- ・遊びの中で、素材の性質に触れ、予想したり試したり工夫したりする姿が見られた。そして実際に体験することで子どもたちが主体的に遊ぶことにつながった。

5. 研究の成果

3歳児は、初めての集団生活を送る中でまずは保育者との信頼関係を築くことが大切である。自分の話を聞いてもらったりスキンシップをとったりしながら安心した環境の中で園生活が送れるようになり、遊びの中でも「やってみよう」という気持ちが出せるようになる。「やってみよう」「できた」の成功体験を積み重ねられるような保育者の言葉がけや寄り添った援助の必要性を改めて実感した。

4歳児は、保育者が子どもの思いや発見、気づいたことなどをしっかりと受け止めタイミングを見計らいながら声をかけたり、満足して遊べるための時間や空間を確保したりしてきたことで自分の居場所を見つけ安心感を得たうえで友達と関わりながら遊ぶ姿につながったと考える。友達との遊びの中で自分のイメージしたことを伝えたり友達の思いを受け入れたり、共感したりすることで同じイメージの中で遊べるようになり、友達と一緒に「やってみよう」とする活動が多くなることがわかった。

5歳児は友達と一緒に遊びを進める楽しさを感じられるように話し合う機会や遊びを振り返る時間を意図的に持つ中で友達同士考えたり、答えを見出したりする姿があった。与えられた環境で遊んだり活動したりするのではなく子ども達自身で考え、したいことを実現しようとする活力が主体的に遊ぶ子どもの姿につながっていくのではないかと考える。

今年度は本研究のまとめとして年齢毎に主体的に活動するために必要な保育者の援助や環境構成について分析することができたと考える。

6. 今後の課題

子どもの興味・関心を引き出すことを大切にしながら、自己肯定感を育み、自分の意志で自信をもって活動できる子どもを育成するための教育・保育を目指していきたい。